

立山マラニックと劔岳

(社)日本測量協会 測量技術センター 井手 康夫

100年前、陸地測量部の柴崎芳太郎ら測量隊が三等三角点埋設のため、前人未踏の劔岳に挑戦した当時のことは、新田次郎著の長篇小説『劔岳・点の記』として1977年に出版されました。私は30年前この小説に感動し、いつか映画やドラマで測量屋のことを世の中に知らせてもらいたいものだと思っていました。その待望の映画化が決まって撮影中とのことで、公開を楽しみにしています。

マラソンのトレーニングとしてここ4年「立山登山マラニック」に参加し、劔岳に登っていることからその近況を記します。

常願寺川河口～芦峯寺～八郎坂～室堂～雄山～雷鳥荘

2007年8月末、早朝4:00「第10回立山登山マラニック」のスタートです。「自らの体力と気力で自然の美しさと厳しさを体験し、自然保護への認識を深める」という趣旨で、常願寺川河口浜黒崎から雄山山頂までの距離65km、標高差3003mを12時間以内で走破する大会です。全都道府県から200名が参加しています。暑さと体力との戦いの末、疲労困憊した体で15:10山頂ゴール。雲上の人となって神社で御祓いを受けた後、室堂へ下って雷鳥荘に全員が宿泊します。

雷鳥荘～劔岳～劔山荘

大会翌日、天気は良さそうなので劔岳行を決めて温泉に入る。ここの宿は、日本で一番高い所(2400m)の温泉だそうで、開け放たれた窓から劔岳も見えます。朝食後6:30に出発。外に出ると清々しい空気の中、真砂岳からの日の出が神々しい眩しさです。雷鳥沢へ下るとテントサイトは朝食や出発準備で賑やかです。沢を越えて傾斜

の緩い雷鳥沢を登って行くと眼下には、今出発して来たばかりの雷鳥荘や地獄谷の噴気が朝日に輝いています。やがて劔御前小舎に到着。行く手には雪溪越しに「岩と雪の殿堂」のキャッチフレーズの劔岳が全容を見せてくれます。今回は劔沢へ下りずに雪溪を横切りながら直接下って10:00劔山荘着。前庭には桶に水が流し放しになっていて、その冷たさと美味しさは格別で疲れを癒してくれます。昨年は当てにして辿り着いたところ、雪崩による倒壊のため改築工事中でがっかりしたことを思い出す。今晚の宿泊を予約して劔岳へ出発。しばらくは緩やかな登りだがやがて浮き石の多いがれきの登りとなる。上り詰めると一服劔です。名前の通り一服するほどの狭い頂である。前劔が手前に重なり奥の劔岳は見えません。前劔の頂上を左に巻いて下るといよいよ最大の難所のカニのタテバイです。登り専用の20m程の垂直な岩場で、鎖を頼りに金属棒に足を掛けながら登らなければならない腕力と勇気の要るところです。取りつく手足の4箇所のうち離すのは1点のみとする3点支持を基本とします。弘法大師が草鞋3000足を費やしても登れなかったとの言い伝えのあるとおり、この鎖と金属棒が無ければ登ることは不可能であろうということを実感する。彼の陸地測量部の測量隊は鎖もない当時、この難所で別山尾根筋からの登頂をあきらめたのでしょうか。後に行者のお告げの「雪を背負って登り、雪を背負って帰れ」ということばで谷の雪溪を利用して現在の長治郎谷から登頂に成功しています。確かに途中で横切った雪溪は、適当に湿って締まっていれば楽に歩くことができました。この難所さえ乗り越えれば頂上はもうすぐです。



雄山ゴール地点、前方頂部に一等三角点立山



劔岳と新劔山荘



劔岳山頂から立山越に槍ヶ岳を望む



三等三角点 劔岳

12:30 頂上着。今登ってきた劔沢の谷底から立山の峰々の全容と富士ノ折立越しに槍ヶ岳が確認できます。東方に目を転じると鹿島槍ヶ岳から白馬岳への連山がまさに大パノラマです。

頂上には珍しく登山者は他にいません。今来た登りでは多くのパーティーに出会ったので朝早く登って午前中には下山するのでしょうか。まず三角点を確認します。2004年に平成の測量隊によって埋設された「三等三角点劔岳」は、何十年も前からそこに在るかのように鎮座しています。三角点の位置は祠から少し下った所で、何の標識も説明も無いため興味を持った者でなければ気が付きません。そのうち、源治郎尾根を登って来たという3人のロッククライマーが到着し賑やかになりました。写真を撮ると早々に沢を下りるとかで支度を始めたので三角点の話をする。「あの新田次郎の・・・」と言って写真に収めていました。下りる際に昨日、カニのヨコバイで若者が滑落し、救助のヘリが飛んでいたのを気付けるようにと言われました。その後5~6人が登って来ましたが、三角点を探す者も気付く者も見かけませんでした。風もなく穏やかな天気です。岩に寝そべっていると眠ってしまいそうです。

14:00頃2人組が下山するというので、先ほどの滑落事故の話をするので初めてなので一緒に下りましょうとい

うことになった。カニのヨコバイは下り専用道で位置的には登りのタテバイのすぐ上あたりで、垂直な岩場を鎖を伝って渡る場所です。足が溝に着きさえすれば鎖を横に手繰って行くだけです。次の垂直に降りる20m程のアルミ梯子の方がよほど緊張します。下を見ないように慎重に1段ずつ降ります。ここを過ぎれば難所は終わりですが油断は禁物です。往きにこんな所を通ったかなと思うほどの長い鎖の岩場の登りや下りが続き下方にやっと劔山荘が見えてきます。

17:00 劔山荘着。今シーズン改築開業したばかりの宿はシャワー・水洗トイレの快適な山小屋でした。

劔山荘～別山～大汝山～雄山～室堂

翌朝、天気も良く6:30出発。途中、行く手の登山道に鳥がいます。雷鳥だとすぐに分かりました。以前にもハイ松地帯を飛ぶ姿は見ましたが間近で見るのは初めてです。この「いきなり! 雷鳥」は逃げる様子もなく、登山道から目線の高さの傾斜面に移動してチングルマの綿毛越しにじっとしてこちらの様子を窺っています。眉毛のような細く赤い肉冠が特徴の雌です。雷鳥は、標高2400m以上に生息している特別天然記念物で絶滅危惧種に挙げられ2001年のデータでは立山一帯で164羽が確認されています。足には毛が生えていて低い声でしか鳴かず、ウサギのような足をしていることから学名の和訳では「だんまりウサギ」と言われています。



カニのタテバイ



いきなり! 雷鳥

朝から得をしたような気分で先を急ぎ、別山～大汝山～雄山を経て12:00室堂へ無事到着。

前は「立山登山マラニック」を完走後、雷鳥荘～劔岳～早月尾根～馬場島荘～伊折～早月川河口(魚津)まで、常願寺川と早月川のそれぞれの河口から源流(最高点)までを3日間で踏破しました。立山周辺は、広範囲に山小屋等が整備されているので、いろいろなコース設定ができます。自分の能力に合ったプランで楽しんではいかがでしょうか。ただし、劔岳は夏場でも滑落事故が多いため、十分気を付けなければなりません。

※掲載写真は筆者撮影